

周辺からの記憶

1. 東日本・家族応援プロジェクト立ち上がる

村本邦子（立命館大学）

東日本・家族応援プロジェクトが立ち上がってから、三度目の東北巡業を終えようとしている。時間は少しずつ動いている。今月は岩手に行ったが、花巻から遠野、釜石、大船渡と車を走らせていると、あちこちで津波浸水を示す標識を見かけ、3.11 が過去のものになりつつあることを感じる。古いナビに頼りながら走っていると、復興道路の工事が進んで、どうやら震災前より便利になっているところもある。三陸鉄道は「あまちゃん」ブームで活気づき、北リアス線（久慈・宮古間）、南リアス線（釜石・盛間）ともに復旧し、駅員さんたちは誇らしげに働いていた。

その一方で、鉄橋が流された JR 山田線の宮古・釜石間はまったく復旧の見通しが立たないという。三陸鉄道の北リアス線と南リアス線をつなぐ線だ。赤字路線だったこと、赤字企業の JR 東日本に国が補助金を出せないというのが理由らしい。「たぶんずっと無理でしょう」と地元の人たちは肩を落としていた。今後、ますます、表から見える復興とその陰に隠れた部分のギャップは大きくなっていくことだろう。ある支援者が、「復興に向かって行動することが、自分たちをさらに苦しめる結果にならないかと懸念している」と言われたことが耳に残っている。

早くも忘却の波が大きく押し寄せている。繰り返されていることの大半は、ほとぼりが冷めると忘れ去られてしまうものである。1964 年と 2010 年はどこか違うのだろうか。同じ過ちを繰り返さないために出来ることのひとつが忘れないことだ。そのために、周辺からの記憶を記録する。（2013 年 11 月）

2011年3月 衝撃

2011年3月11日、衣笠のキャンパス内を歩いていて、軽い眩暈を感じた。過酷なスケジュールが続いており、海外出張から帰ったばかりで、もうひとつの海外出張が控えていた。要注意だと思った。間もなくして、それが地震で、東北が大変なことになっているらしいというニュースが耳に飛び込んできた。私たちは確かに同じ大地の上にいる。翌日には立命館で日本集団精神療学会の大会が開催され、震災の影響で来られなかった講師があり、その影響を乗り越えて何とか京都までたどり着いたという参加者があった。大会長の藤信子先生より「歴史のトラウマ」をテーマにした招待ワークショップを頼まれていたので、新たな「歴史のトラウマ」が生まれようとしていることに圧倒される思いで、何とか役割を果たした。誰もが起こっていることをうまく呑み込めず、ある種の昂奮状態にあった。おそらく日本全国がそんな感じだったろう。

翌朝、成田経由でニューヨークへ飛ぶことになっていたが、飛行機が飛ぶのかどうかも覚束ない状況だった。欠航となれば、それはそれで仕方あるまいと、とりあえず成田まで行ったが、成田では激しい余震と同時に地震警報が飛び込んできた。いったいこれから日本はどうなってしまうのだろう。足元がグラグラ揺れ、世界にひびが入ってしまいそうな予感を胸に、それでも飛行機は飛び、日本を後にした。長いフライ

ト中、眠れぬままに何本か映画を観た。そのなかには、生々しくショッキングな「ヒアアフター」も含まれていた。日本では2月中旬から公開していたが、津波のシーンが震災を連想させるということで、3月14日に上映中止になったものだ。

ニューヨークから列車に乗ってニューヘブンへ。イエール大学の先生方に暖かく迎えられたが、みな眼に涙を浮かべながらお見舞いの言葉を述べ、被害状況を尋ねてくれる。海外の友人たちからも安否を確かめるメールが入り続けていた。日本にいれば関西と東北は遠いが、小さな島国をひとたび遠く離れてしまえば、距離などないに等しい。自分や身近な者に直接的被害はなくても、アメリカではあたかも被災者であるかのように扱われた。口々に見舞いの言葉をかけられ、戸惑いつつ「私は大丈夫だったんです」と応えながらも、「ありがとう」と感謝を表する役割を取るようになった。

被害状況を十分に理解できないまま旅立ったが、あちこちで衝撃的な映像の断片が眼に飛び込んでくる。日に日に、そんな大変な状態にある「祖国」を捨て置いて、こんなところで仕事をしている場合だろうかという罪悪感に苛まれ始めた。自分の語彙に「祖国」という語が生まれて初めて加わった瞬間だった。多かれ少なかれ、国外にいる日本人は似たような状況にあったのではないだろうか。3月16日、東海岸から西海岸へ飛び、サンフランシスコにある協定校 CIIS を訪れると、日本人留学生たちが大変な状態だからセルフヘルプグループを立ち上げるというので、行ってみることにした。

彼女たちは、日本の惨状が報じられてか

ら、テレビの前にくぎ付けで、飲まず食わずに近い状態で、「今すぐにも東北にボランティアに行くべきではないか」と思い詰めていた。心理的には、あきらかに被災状況にあった。国外に暮らしていた日本人についての状況を聞くと、この時期、たとえば関西や九州に暮らす人たちよりも、国外に暮らす日本人の方が、心情的にはずっと東北に近かったと言えるかもしれないと思う。一方的に入ってくる情報に圧倒され、家族や友人、大切な人々を置いて遠くに出てしまった自分を責め、無力感や孤立感もある。「今すぐ被災地に飛び込むこともできるが、今回は長期戦になる。よく考えてから動くこともできる」と助言しながら、自分自身のことを考えていた。

人をボランティアに駆り立てるのは、その問題と自分との距離感であろう。他人事だと思えなければ、人は動かざるを得ない気分になるものである。災害との距離は、物理的距離だけで測れるものではない。自分の暮らす土地で災害が起きれば、当然、距離は近くなるが、たとえその地に暮らしていなかったとしても、自分の故郷であったり、自分にとって大切な人が暮らしていたりすれば、心理的距離はぐっと近くなる。もっとも、事件や災害が起こるたびに、誰もが繰り返しマスメディアを通じてその悲惨な映像に晒されることになる昨今、報じられる出来事が大きければ大きいほど、その出来事との距離は近づいていくだろう。その一方で、時間経過に伴い報道に触れる機会が減っていけば、あっという間に忘却の彼方に沈んでいくことになる。

ふだん西日本で仕事をすることの多い私にとって、東日本は、それほど近い土地で

はなかったが、災害の前後ひと月、ほとんど日本にいなかった私は、遠く海外から日本を思い、いたたまれないほどの罪悪感とともに距離感覚は限りなく近づいていった。加えて、あろうことか、この時期、私は休暇を取ってハワイで過ごしていたのだ。3月21日にサンフランシスコから帰国し、22日に大学の卒業式に出席して、23日から家族で息子の留学先を訪ねる予定になっていた。キャンセルすることを何度も考えてみた。どう考えても、結論は見えていた。旅行を1週間キャンセルして自分が現地へ行ったとして、この状況では何の足しにもならないことはわかりきっていた。

私には、阪神淡路大震災の時の経験がある。あの時は、震災1週間後から半年間、毎週、現地に通ったが、自分の生活は半年で日常に戻った。被災の中核にいた人々にとっては、いつまで経っても拭い去ることのできないものが残るのに、周囲の者たちにとっては、いつしか遠い過去の出来事になり、次々と新たに起こる大きな事件や災害に関心が移っていくのだ。今回は自省の念をこめ、「衝動に流されて動くのはやめよう。責任を持って、細くとも長く自分のこととして関わり続けることのできる方法を考えよう」と思った。二十数年にわたってトラウマに関わってきた経験からも、災害直後のこの時期、心理面でできることはまったく限られている、わずかながら経験と年齢を重ねた者として、少しは賢明に動きたいと思った。

災害の中心部にいれば、選択の余地なく大きなエネルギーの渦に巻き込まれてしまう。災害との間に距離があれば、選択肢が増える。それは基本的に偶然によるが、意

図的選択によって変化もしていく。今回は遠いけれど、次回は真っ只中にいるかもしれない。選択肢があるのなら、自分に与えられた条件を最大限活かすことのできる選択をする方がいい。自ら中核に飛び込めば、否応なく距離感のないところに自分を置き、渦に呑み込まれてしまうだろう。そういう人たちも必要だ。現地に飛び込んで無我夢中で行動し、その場に漂う空気を全身で感じた若者たちのエネルギーは尊く、未来の力になっていくことだろう。でも、自分は今もうそれほど若くない。

ハワイ行きの飛行機に乗った人々は、みな明らかに言葉少なく、身を縮めていた。空港へ降り立って初めて、全体が「フー」と大きく息を吐き出した感じがした。いろんなことが自粛されていた時期である。ほとんどの人は、震災前に旅行を計画し、一度はやめるべきかどうか迷ったことだろう。楽しみに計画していたのに、選択の余地なく行くことができなかった人々、ひよっとすると永遠に不可能になってしまった人だっていたかもしれない。避難する人もいたようだし、あまりの重荷に早く逃げ出したかった人もいたかもしれない。

ハワイへ着くと、中学時代からラッパーをしていた息子が、初めて英語のラップ”Pray for Japan”を書き、現地の友人たちと、キャンパスやら街中のバーやらラジオにまで出て、チャリティーライブをしていた。素直に自分のいるところで自分にできることをするというシンプルな姿に、少し救われる思いがした。私にもきっと何かやれることがあるだろう。

2011年5月 閃き

ラファエル（1995）によれば、地域社会を災害が襲うのは、池のなかに石を投げ込むようなものである。その波紋が地域社会全体に広がって、さまざまところに時間的にずれて到着し、影響を及ぼす。この波紋はすでに影響を受けている部分をさらに揺さぶり、中心に近くてその力がまだ衰えていない場合には、大きな衝撃を生むことになる。地域社会という池の大きさ、それに投げ込まれた石の大きさとその衝撃の度合いによって、池のなかの状況は最終的に変化したり、しななかったりする。今回の災害の場合、投げ込まれた石は巨大であり、しかも投げ込まれた場所は1ヶ所だけではない。時間差をもって、あちこちに大きな石が投げ込まれ、ひよっとするとこれからもまだ投げ込まれないとは言い切れない。あちこちの中心から広がった波紋が互いに影響を及ぼし合い、増長し複雑化し続けている。

東日本大震災の特徴は、地震、津波、原発という三種類の複合的な災害がもたらされ、その影響は空間的にも時間的にも途方もなく大きな広がりを持ち、予測不能性を含んでいることにある。とくに原発に関わって、日本というシステムは、根源的なところで問い直しの必要を迫られている。戦後の復興が経済効率に照準を合わせてきたことの過ちは、バブル経済の崩壊で露呈し、今回の震災で完全に底をついた。ここから先は、単なる復興ではなく、長期的視点をもって、私たちの社会がこのシステムをど

のように立て直していくのかが問われている。被害規模から言って、どれだけ多くのボランティアが長期に渡って支援に入ったところで、一人ひとりにケアが行き届くことは不可能である。大きな喪失と混乱を抱えながら、生き延びた人々は生き続けなければならない。家族は生活を営み、子どもは成長していくだろう。それぞれがそれぞれの場でできることをやっていくしかない。

そんなことを同僚の団士郎さんと話していたら、むつ市の児童相談所の杉浦裕子さんから、むつ市図書館で漫画展をやってももらえないだろうかというメールが届いたという。そうそう、確か、前に、むつ市図書館のギャラリーが素晴らしくて、「こんなところで漫画展ができたらいいなあ」と話していたと聞いたことがある。むつ市では津波の影響はほとんどなく、震災後も変わらない生活を送っているように見えるが、海上自衛隊で働くお父さんが多く、被災地に派遣されて、余震が続くなか、心細い日々を送った家族が多かったという。また、出稼ぎなど県外就労している家族も多く、東京電力福島第一原子力発電所で死亡が確認された社員2人のうちの1人はむつ市出身だったそうだ。下北半島には、東通り原発や建設中の大間原発、六ヶ所村の日本原燃再処理工場がある。マスコミに登場しはしないが、こんなところにも、すでに大きな波紋が複雑に影響を及ぼしあっているのではないか。

「それ、グッドアイデア！青森から東北を1県ずつ南下していこう。漫画展にちょっとプラスして、団さんや私がこれまであちこちで続けてきた支援者向けワークショップや子どもたちのための遊びワークシ

ョップなんかもやってみたらいいかも」と話が盛り上がり（というか、私が勝手に話を盛り上げ）、結局、この企画を立命館大学大学院応用人間科学研究科のプロジェクトにすることにした。今回の大きな災害に対して、多くの大学が自分たちの果たすべき役割や使命について考えていた。立命館大学はもちろん、私たちの所属している応用人間科学研究科は、「対人援助学の創造」を掲げて十年前にスタートした専門職大学院であり、「研究科として何かすべきではないか」という声が上がっていた。私はたまたま副研究科長をしており、中心になってお世話すべき立場にあった。研究科の理念である「連携と融合」にもばっちりフィットするではないか。

早速、同僚の中村正さんに持ちかけると、「いいじゃないですか。私も何かやりましょう」と賛同してくれ、研究科長の荒木穂積さんも「それはいい」と言ってくれた。他の先生方は「いいけど、どうもよくわからないなあ」という反応だったが、少なくとも反対の声はなかった。そして登場するのが、もう一人の重要人物、クレオテックの平田さなえさんである。イベントをやるなら誰か専門にやってくれる人が必要ではないかと考えた時、突然、頭に浮かんだのが、8年ほど前、コミュニティ心理学会を立命館でやった時にお手伝い頂いて、素晴らしいプロの仕事を見せてもらった人だった。その後、接点はなく、「さなえさん」しか覚えていなかったのだが、応用の事務を担当してくれていた長谷川敏子さんに聞いてみたら、「それなら、平田さなえさんでしょう。ちょうど今日来ますよ」ということで、とんとん拍子に平田さんと結びつ

き、「是非、お手伝いさせてください」という運びになった。

これまでいろんな企画を立てて実行してきたが、企画がうまく進む時というのは、面白いように不思議な偶然が重なるものである。私はこれを「天の導き」と呼んでいるが、これはきっと集合的無意識の次元で（単に社会的次元で言えば良いのかもしれないが）大きく何か動いていることを表しているのだと思う。ここでも災害の影響が大きな波紋となって呼び合い、重なりあったのだ。きつとうまく行くだらう。後は、企画の具体的な詰めと予算だ。まあ、なんとかなるだろう。いや、なんとかするしかない。やるならば十年である。団さんと中村さんには、「万が一、予算がなくなったら、私たち3人で割り勘して、最低限の企画を十年続ける覚悟じゃないとダメだけど、いい？」と念のための確認をして、動き始めた。

2011年7月 準備

企画を詰めるにあたって、まずは、自分たちの持つ力を見定めることが重要だろう。今回の災害では、複数の機関が「こころのケア・チーム」を結成して、体系立てた危機介入を行っていた。玉石混交であったことは間違いないが、それでも、暗中模索するしかなかった阪神淡路大震災の時と比べると、格段に洗練された方法で介入が行われたと思う。でも、私たちのやろうとするプロジェクトは、「こころのケア」とはちよ

っと違う。距離や時間的条件を考慮すれば、細く長く関わりながら、遠くにいる私たちが何かをするのでなく、コミュニティに本来ある力を活性化できるようなきっかけを作るようなことができるといい。

私たちの弱みは遠方であることと、多忙な日常を送っていること。頻繁に長期で現地滞在することはできない。強みとしては、私たちの研究科は、心理、教育、福祉など対人援助に関わるさまざまな領域の専門家たちから成り立っており、支援対象は多岐にわたる。このリソースを活かして、情報提供や研修、コンサルテーションなど行えるかもしれない。大学ということで信頼を得やすいだろうし、研究費や実践プロジェクトに対する資金も得やすく、組織としてのネットワークもある。まずは、イベントという形で、定期的に東北を巡る舞台セットを作ることだ。その中心は団さんの漫画展。これは、今回、一番強力なリソースとなる。そこに週末のプログラムをセットし、毎年、定例でやってくるサーカスカメリーゴーランドのような地域のお楽しみにする。

これまでの実践から学んできたことは、コミュニティに働きかけようとする時、何か仕掛けを作るのがよいということだ。90年代、「子育て支援」という言葉がなかった頃、子育て支援の企画でよくご一緒していた人に、東京おもちゃ美術館の館長多田千尋さんがいる。多田さんは心理学者でも何でもないが、おもちゃや遊び、芸術教育を通じて、実にスマートに子育て支援の場を拓いていた。「子育て支援をしますから集まってください」と呼びかけるよりも、「おもちゃの修理をしますよ。壊れたおもちゃを持ってきてね」と呼びかける方が親子は集

まってくる。そうやって人と人との関わりが生まれる場があるとコミュニティは活気づく。

阪神淡路大震災の時もそうだった。震災直後より神戸に入り、あれこれ試して最終的に行き着いたのは、YMCAの子どもの遊びボランティアだった。避難所で子どもたちと遊び、スタッフミーティングに参加していたが、これはとても自分が機能するやり方だった。基本的には子どもと楽しく遊ぶのだが、子どもたちの何気ない遊びのなかに、時折「あれ？」と思うトラウマ反応や表現がある。必要に応じて専門的対応ができるし、ミーティングでボランティアの困惑に助言できる時、心理の専門家であることもまんざら無駄ではないなと思ったものだ。日常、専門家としての枠組みのなかで人と関わる時、どこか自分を切り売りしている気分になることがある。こんなふうに、一人の人としての自分と専門家としての自分が統合されたあり方で人と出会う方が好きだ。今回もそんな出会いができるといい。こういった出会い方は、その後、DV被害に遭った母子支援プログラムなどにも活かされてきた(村本、2008)。

多田さんのところでおもちゃや遊びのアイデアをもらおうと連絡を取ったところ、さすが東京おもちゃ美術館は、2週間で1万個のおもちゃを集め、4月7日から、陸前高田、気仙沼、宮古など被災地70か所に遊び支援隊を派遣し、遊びプログラムと遊び環境セットの寄贈を実施していた。救援物資のようにおもちゃを送るのではなく、おもちゃコンサルタントが遊びのコンテンツと環境を届ける活動をしているという。その多田さんからは、「私を知る限り、十年も

の長期スパンで被災地支援を打ち出しているのは、村本さんだけだと思います。さすが！」と誉めてもらい、遊びの環境セットのアイデアを頂いた。遊びの環境セットとは、4畳半分の硬質段ボールで作った床材と赤いプラスチック段ボールの箱に入った50個ほどのおもちゃを合わせたもので、一流デザイナーによるものだという。夢は膨らむ。ところが大学の助成金申請結果が思うように行かず、遊びの環境セットを購入する予算がなくなってしまった。7月に出会ってすっかりしょげている私を見て、多田さんが「お金はいいよ、村本さんに2セットあげましょう」と言ってくれた。

次は、各地の受け入れ機関を探すことだ。地域としては、もっとも被害の大きいところ、被災状況の深刻なところよりは、むしろ、逆に、イベントができるだけのコミュニティの機能が残っているところで、イベントに参加してみようかなとやってくる力の残っている人々のいるところを考えてみる。企画の趣旨自体が、人々やコミュニティのレジリエンスを高める予防的働きかけにある。イベントに参加してくれた人々が、ほんの少し元気になって、周囲の人たちをほんの少し力づけてもらえたら、コミュニティ全体がほんの少し元気になるはずだ。協力機関には負担もかけるが、それによって元気になるような企画にしたい。現地の支援者たちと絆を作り、そこを基軸に情報や応援のメッセージを送り続けることができるだろう。いわゆる後方支援である。これは、西日本を中心にした複数の地で婦人相談員の継続的支援を行ってきた体験に基づく(村本、2010)。

とは言うものの、私たちが被災地に入っ

てやるのが結果として支援的に働けば幸いだが、それは何の保証もない。ただひとつできるはずのこと、つまり私たちのミッションは、被災と復興の証人 (witness) として存在することである。長くトラウマ・セラピストとして働いてきたが、他者にできることなど無力に等しいことを知っている。できることと言えば、不運や苦境を生き抜いてきた人の証人 (witness) として存在することに尽きると思ってきた。

都会で便利な生活を営みながら、いつの間にか 54 基もの原発が作られていたことを認識していなかった自分は、無関心という形で加害者側にいた。たとえば、これまで研究してきたホロコーストを例にとると、犠牲になった人々の存在を忘れ去ることは犯罪者の意図に加担することを意味する。逆に、その存在を心に刻み、歴史の証人となることは抵抗を意味するのだ。距離があるから見えないこともあれば、距離があるからこそ見えることもある。時間が経っても忘れ去ることなく、コンスタントに関心を持ち続け、被災地の人々が、それぞれなりの復興の物語を創っていく過程を歴史の証人として見守ることができたら、遠くにいる私たちも私たちなりの復興の物語を創っていけそうな気がする。

夏休みをはさんで、9 月、いよいよむつでのプロジェクトがスタートする。

～続く～

文献

村本邦子 (2008) 「DV 被害を受けた母子への二次予防的介入」『コミュニティ心理学ハンドブック』(日本コミュニティ心理学会編) 東京大学出版

村本邦子 (2010) 「支援者支援という対人援助の可能性～女性支援構築のための婦人相談員研修の実践から」『対人援助学の可能性—「助ける科学」の創造と展開』(望月昭、中村正、武藤崇、サトウタツヤ編) 福村出版

村本邦子 (2012) 「東日本・家族応援プロジェクトを立ち上げて」『コミュニティ心理学研究』第 15 巻 2 号 55-65 頁

ラファエル, B. (1995) 『災害の襲うとき』(石丸正訳) みすず書房